

10月学習会のご案内

平成25年10月6日

気がつけばすでに秋風の漂う10月となりました。いかがお過ごしでしょうか。附属小学校では、10月26日（土）に研究発表会が行われます。今はそれへ向けて追い込みを掛けている時期です。

さて、先月の語る会は、「どうぶつのあかちゃん」をおもしろみつけで読むとすればどうなるかということでひそやかに開催いたしました。200回記念講座が無事終了して最初の会ということもあったのか、やや参加される先生の数が少ない状況でした。そして、今月は丸ごと読みで読むとどうなるかということをお話し合う予定でしたが、事情で、それは来月送りとなりました。ですので、今月は小野先生に登場していただきます。

ご案内がぎりぎりになってしまい、申し訳ありませんでしたが、ぜひ、今月の語る会もよろしくお祈りします。

日時 平成25年10月12日（土）9：30～12：00
 場所 岡山大学教育学部附属小学校 2階 会議室（変更の可能性あり）
 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
 連絡先 小出 真規（こいで まさき）TEL 090-5704-7339
 m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
 内容 「生き物はつながりの中に」（光村図書6年）
 小野 桂先生（岡山大学教育学部附属小学校）

<お知らせ>

※「おもしろ見つけ」の本を、附属小でお取り扱いしております！来られ前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。（特価！）多くの方に手にとっていただけるように、みなさん！宣伝活動がんばりましょう！

※ 駐車場について

今後10ヶ月程度、附属小学校では、体育館の建設が行われます。それにともない、駐車場が「教師教育開発センター 東山ランチ」になります。「実践センター」という呼び方がかつてしていたところで、学校の南西にある建物です。よろしくお祈りします。わかりにくいようでしたら、当日朝、小出の携帯にご連絡いただければと思います。



岡山大学教育学部附属小学校 平成25年度教育研究発表会のご案内

本年度の研究発表会は、昨年度に引き続き「考える力を育てることばの教育」というテーマのもと、副題を「自己を見つめることで高まることばの学び」として提案をいたします。ぜひ、大勢の先生方にお越しいただければうれしく思います。以下ご案内申し上げますので、どうぞよろしくお祈りいたします。

期日 平成25年10月26日（土） 8：15～（受付開始）

公開1 9：00～9：45（4年ろ組教室）

塚本さんの調査ってやっぱりすばらしいな！「ウナギのなぞを追って」

4年ろ組 難波香織

公開2 10:00～10:45 (1年は組教室)
 いろいろなじどう車をくらべて読もう「じどう車くらべ」等
 1年は組 小出真規

公開3 11:00～11:45 (6年い組教室)
 使われなくなっていく言葉は本当に大切? 「言葉は動く」等
 6年い組 小野桂

よろしくお願ひします。詳しい情報は、ホームページをご覧ください。

9月の学習会の報告

(文責 小出真規)

9月の語る会は、「どうぶつのあかちゃん」(光村図書1年下)について話し合いました。

田中先生より

○本日の話題

- ・今週は、「どうぶつのあかちゃん」のおもしろみつけについて
- ・来週は、説明的文章の丸ごと読みだしたらどんなふうアプローチするのか
- ・今までにも、おもしろみつけの報告はある。丸ごと読みだとどうなるのかどうちがうのかというところをクローズアップしようという小川先生の考え
- ・今日は、まず光村の教科書における説明文の組み合わせが変わってきていることについて
- ・それから、「どうぶつのあかちゃん」をおもしろ見つけで授業をすれば、こういった観点が必要になってくるのかについて話し合っていく。

○光村の1年の教科書の構成について

- ・大きく変わっていないようで変わっている
- ・最初は「くちばし」。「いろいろなくちばし」から「くちばし」へ変わった
- ・「いろいろなくちばし」のときは、教科書見開きの左側にいろいろなくちばしの写真が8か10枚並んでいて、それから本文が始まっていた。最後は似たような感じであるが。
- ・ベースは問いと答え。特殊な用語ではなくて、普通にやっていること。
- ・前の教科書の文章だといろいろなくちばしの写真があがってきて、くちばしが見えてきて、事例があがってというタイプだった。文章全体を統括する問いの意識から入っていきその事例がいくつか挙げられ、最後にもう一度戻して、いろんな鳥のくちばしについての認識をもって収束するとなっていた。
- ・それが、そうではない形になった。現行はなぞなぞ。クイズ形式で始まって、その後形と機能の説明が加えられるタイプの3つの事例。クイズで終わっている。
- ・最後の写真は、中途半端で広げる方向も残っている。
- ・この変更が第2教材「みいつけた」に影響を与えている。
- ・「みいつけた」の意味は、冒頭に「みいつけた」全体を統括する問いが出てくるところ。
- ・「くちばし」では、文章全体の問いは子どもには認識できていないという位置付け。先生は別だが
- ・「みいつけた」では、文章全体の問いがあがっていて、それを確かめるために事例があがっている。
- ・それぞれの事例は似ているが、問い→答え、問い→答え・・・という形式ではなくて、大きな問いがあって答えがくるという形の文章に変わっている。
- ・大きな全体を統括する問いがあるという認識が学習者の中に入っていくというところに重きを置

く教材。

- ・第3教材は「じどうしゃくらべ」。大きな問いがあるオーソドックスな形。ここまでくるのに第1, 第2とていねいに構成してある。というところが光村の教材の特色。
- ・このように分けるのが、いいか悪いかは別として、スモールステップで構成してあるというのが特色。
- ・「じどうしゃくらべ」は、明確に問いの文が2つそれぞれに対応する事例を中心とした答えが構成されている。
- ・そこから、「どうぶつのあかちゃん」が出てくるので、扱う順番は変えられないようになっている。
- ・事例を収束する最後の文章は出てこない。そこまでいかないものとして出てきている。
- ・「どうぶつのあかちゃん」の問いは、どんな様子をしているのでしょうか。どのように大きくなっていくのでしょうか。という2つの問いがあり、ライオン、シマウマについてそれぞれ答えを用意している。
- ・「どうぶつのあかちゃん」では、今回から、カンガルーが復活している。
- ・光村の場合、相当に文章構成などの説明の工夫が順々に出てくるという点で考えたものを編成している。
- ・よく考えられていると見る向きもあるが、教えていくことを一つ一つ教えていったらうまくいくだろうという考え方については、そううまくいくとは限らないとも思える。
- ・「じどうしゃくらべ」は3つの事例があって、4つ目を考えることになっているが、「どうぶつのあかちゃん」はそうではない。観点によって取り上げる動物を決めたら、そういくつも考えられない。総枠が決まっている中で2つ、3つにしたり、大きな話なのに、行ったり来たりは節操がない気もする。
- ・学校図書の「どうぶつのあかちゃん」は「かば」、「うま」、「さる」が取り上げられて、生まれてすぐのことが述べられているなど2文づつでほしい同じ構成が繰り返されている。
- ・同じ「どうぶつのあかちゃん」ということで、大学の授業などではよく取り上げられている。
- ・でも、2つはちがう。
- ・学校図書の「どうぶつのあかちゃん」は食べられる食べられないの関係はなく、住んでいるところのちがいで上げられている3種類。生息場所の違いでいけば、プラス2つ3つの事例はあげて付け加えることもできる。
- ・光村は肉食と草食の区別が明確。だから、3つ目が大変。肉食草食の観点からいけば、3つ目は雑食の代表。何を上げるかが難しい。
- ・雑食であげるとしたら、・・・人間。でも、それは倫理的に問題があるかもしれないので、ねずみとか熊…そう考えると困る。代表が熊とねずみでは違い。両方とも雑食ではあるが、極端に違うので、事例として挙げにくい。だからもう一つの観点をもってきた。
- ・小学校の説明文の事例は原則的に3つ。かつて2つがなかったことはないが、それは例外。いよいよの入門期のみ。
- ・3つには大きな意味がある。3が圧倒的によい。4は教えるのが大変。教えるなら4つは大変。2つは物足りない。事例が挙がるということは、比べるということ。認識の問題としては、必ずやる。2つはすぐ終わる。3つは、比べるパターンが3回。最後の総合もできる。だから3つがよい。4つは…6パターンプラス4プラス全体となり大事になる。だから3つ。
- ・筆者は3つを守ろうとした。3つ目は何するか。違う観点をもってきた。「うまれてすぐの様子」という観点。第3の生まれてすぐの様子を筆者は考えたはず。
- ・カンガルーは草食であるにもかかわらず、超未熟児で生まれる。有袋類しかない。という構成で作られている。それをしたために観点がややこしい。最後の総合するときがややこしい。肉食草食の観点からいくとカンガルーが言えない。姿形の観点でいくとようやく落ち着けることはできるが、特徴的な肉食草食が消えてしまう。比較はできるが、2つの観点が出てきてややこしくなっている。
- ・そのことを踏まえておもしろみつけとして教材研究をして、気づきの観点、〇〇反応を考えていく必要がある。どんな観点を大事にしていったらいいかということに話をしていく。

1:17:16

グループの発表

1グループ

- ・おもしろみつけでライオンのところだけ読むと生まれたばかりの姿がちがうと子どもたちは言うてくるだろうと予想。でも、ずっとちがうんじゃないかと、途中でできるようになってくることもあると子どもたちは語ってくる。自分でできるようになるのは、ライオンだったら1年後くらいだなあ、生まれたばかりの様子や大きくなっていく様子を読む観点としては、お母さんと子どもをくらべるとということでもとめになってくるのではないかな。
- ・次のシマウマは、母子が似ている、ライオンはできないが長かったけど、こっちはすごいという観点で読んでくる。なんで似ているのと切り返すと、だから逃げられるのです。に来る。そしてライオンに戻ると、だって強いから、できなくても大丈夫。だから口に運んでもらってもできると「だから」を補って読むことができる。
- ・次に、カンガルーでも、母子を比べて読むという読みを行っていくのではないかな。お母さんと子どもをくらべるというのは一緒に、動物が加わってくると前の動物とくらべるという読みになってくるのかな。
- ・おもしろみつけをすると、どんな力を付けることができるのかなと考えると動物の母子を比べる、動物同士を比べる、その理由を見つけていくということなどが、考えられる。でも、問いと答えで考えるとそこが弱くなる。
- ・丸ごと読みでいくと、子どもは全部動物が違うというところが出てくる。生まれたばかりの様子がちがう大きくなっていく様子が違う。2つの違いが出てくる。問いと答えというところでは、シャープにいける。大きな問いを確かめていくことができる。構成についても考えることができるのかな。

2グループ

- ・似ていない、すごい、そっくりなどが出てくる。じゃあ、ライオンのすごいところはないのか。獲物の捕り方を覚えるというところがすごいところとして出てくる。覚えるはシマウマにはない。というところを押さえていきたい。
- ・シマウマの場合は、お母さんにそっくりという感想が出てくる。ライオンと比べ出すので、成長が早いというところに子どもの目が向く。
- ・カンガルーは両方がミックスされているので、最初はライオンみたいに弱々しいけど、「はいあがっていく」というところから、シマウマのように自分の足で行動するというところに気付くかな。キーワードとして、「自分で」が3カ所あるので、自分でできるようになるまでの速さについて気付かせていきたい。
- ・図鑑を作る実践では、最後に表にまとめて、成長の様子を比べてそれをもとに別の動物を提示したときに、どこが似ているかなとしたときに、その表があれば目を向けることができた。最後に問いと答えをまとめるということにはならないが、表にまとめると、どんな様子、どのように大きくなっていくことができているのかなという形で授業ができるのではないかな。

3グループ

(授業作りについて)

- ・おそらく子どもは、ライオンとシマウマは対比的にとらえる。くらべると意識をもって読むのではないかな。もう一つのイメージは、ライオンは強いのに赤ちゃんは弱い。シマウマはその逆。2つの問いを大きく掲げて、様子と大きくなり方について感想が、やさしい、すごい、かわいい、大きい、などが出てくるので、それについて読んでいく。
- ・前の実践では、人間の赤ちゃんから入ってというのがあった。それは、ライオンを読む段階から比べて読むということ。また、ライオンで、やさしい、弱いとかかわいいで読んで、シマウマのところから比べて読むということもできる。大きさ、様子、歩き方、(成長の)期間は数字で実感して比べられる。もう一つは、筆者を意識させるということで、ますいさんの「もう」とか「たった」

などますいさんが驚いている言葉があるけど、どれかなということを読ませていくことができる。ライオンとシマウマの2つで、最後のまとめで、それぞれの暮らしにあった育ち方をしていね。というまとめをしたことがあったが、カンガルーではそれは生きてこない。カンガルーが出たときにはたくさんの視点が出てくる。また、カンガルーを出さずに、どういう順番で書いていると思う？と問うと、文章の構成に目を向けていくことができるかもしれない。1年生でそこまでやるかどうかは考えないといけないが。

(カンガルーの赤ちゃんが出たときに子どもの意識の流れがどう動いていくか)

- ・カンガルーの中でつながりを考え始める。こういう生まれ方(未熟)をしているから、袋に入らないといけない。ライオン、シマウマもそういう生まれ方をしているからそういう育ち方をしているというように、動物同士でくらべるだけでなく、その動物の中でつながりを考えて読むということができる。

4 グループ

- ・子どもは、最初、気持ち反応で読んでくる。読み深めは様子反応で読んでいく。お母さんとくらべてどうなのかと比較することで、読み深めていくことができる作品なのかな。
- ・筆者の伝えたいことをどう扱うかについては、授業の終盤で、ライオンとシマウマの両方を比べる。生まれた時は弱々しいけど、段々強くなっていく、あるいは、お母さんとそっくりなように強く生まれてくる。生まれた様子と育ち方がつながってくるということに気付かせることができる。
- ・最初に二つの疑問が出ているが、子どもたちがおもしろみつけで反応を大事にした授業にすると、生まれた時の様子と大きくなっていく様子と混在した感想を出してくると考えられる。それらを二つの疑問の観点にどのように整理していくかというところが難しい。
- ・最初から、二つの観点で読んでいくことで、筆者の伝えたいことに焦点化していくこともできる。
 - ・田中先生からは、最初から観点を大事にして読むことで筆者の伝えたいことに迫っていくことができるのではという話をして頂いた。

田中先生より

- ・そもそも今回は、おもしろみつけで話し合い、来月は丸ごと読みで話し合いましょうということではあったが、「どうぶつの赤ちゃん」を読んでいくにはどっちでもいいのかというより、どっちかで読む方がいいのではないかという話もあるかもしれない。
- ・「どうぶつの赤ちゃん」という題名に着目していくことは、早い時期からやっていっていい。イメージはかわいい、小さい、弱いなどが出てくる。それは、親とくらべて見ているんだよね。としていくと読みの構えから比べるということが出てくる。
- ・「どうぶつ」といって思い浮かべるのは、どんなどうぶつかなというのもあり。そうすれば、筆者がどんな動物を代表として選んでいたかなということでもくくっていくこともできる。
- ・冒頭の問いと答えをしっかりとさせるということも1年生の学習ではベースになるところで、それ以降も問いと答えはしっかりと考えていく。中学年で問いがなければ、それを考えていくという学習も入ってくる。その問いを想定するというのは、問いと答えがあるというベースがしっかりできていないと、なぜ問いを考えなくてはいけないの、先生が言うから・・・考える、となると学習がしっかり位置付かないので、そういう意味では、問いを読むという構えを作っていくのが、低学年の大きな課題だと思っている。
- ・題名読みから、冒頭まで1時間の授業をとっていい。そして読みの構えを作っていく。
- ・そして、おもしろみつけをしていくなら、ライオンを読み、シマウマという順序で学習を進めていくのが順当。ライオンを見ると、問いからどのように生まれてくるか、どのように大きくなっていくかを読み取ることがベースにあるが、そこで、書かれている情報について初めて知った、納得した、知っていたよ、ちょっと分からないという反応が出てくる。そこで、なるほど反応、納得反応、疑問反応のようなものが出てくる。ライオンのところでは、親との比較反応は出てくるが、シマウマとの比較は出てこない。ライオンのところを読む時に、大人が読むと、ライオンはそうなん

だと読んでいるかということ、人間の場合だったら、と比べながら読んでいくんだらうな、

- ・そうした発想はおそらく認識の方法として、子どもが生まれながら持っている認識の方法なのではないか。子どもは、既存の経験とくらべながらしか対象を認識することができない状況で言葉を獲得していくものなので、例えば犬を飼っていたらその犬の赤ちゃんとくらべながら読んでいく。そう考えるとライオンを読む段階でも比べ反応が当然出てくる。それを取り上げていったら、3つの比較、自分の既存知識とライオンとシマウマを比較をしながら読んでいくことになるのではないかとと思われる。
- ・文章の分析をすると、植山先生も着目するところですが、「のです」がそれぞれの事例の1カ所にしか出てこない。2文目の最後のところ。2文目は、問いでいくと「どんな様子をしているのでしょうか」に対してくくっていくところの文。能力やできることに関わる部分。そこに注目しているということが「のです」でよくわかる。授業のまとめの方向としては、そこにもっていくことになる。
- ・特徴的な表現が出てくるので、表にすることではっきりとしてくるということもある。物語を読むことと照らし合わせながら考えていくと、「初めて知ったな」「これなぜ」といった部分は基本的に情報駆動。書かれている情報に対して反応している。自分のもっている経験に対して反応していく。
- ・情報駆動というのは、教えなくてもできる側面があるし、教えたからといって経験がなければ、できない。指導の対象としはしにくいという面もある。説明文の場合、その情報の部分が文章を読む場合の重要な部分になってくるということ言えば、物語の場合よりも情報駆動の部分をていねいに取り上げていくことが大切になってくるのではないか。
- ・ストーリー駆動、登場人物と出来事と変化をベースにしたストーリー駆動を低学年でしっかりやってみようということは、今までも話してきたが、それに相当するのが、問いと答えに相当する部分でどんな問いが設定されていて、どこに書いてあるということをしていくのストーリー駆動になる。
- ・ポイント駆動、どうぶつの赤ちゃんといったときに、筆者はライオンとシマウマという対照的なものを取り上げて、他のものは入ってきていない、カンガルーは入ってきているが、動物というものをこんなふうにとらえていたんだね、というように読んでいくのがポイント駆動。1年生なりのポイント駆動で、低学年ではそう一生懸命しなくてもいいが、いれるとすれば、こうした筆者はなぜそうしたのかということを見ていくのがポイント駆動になる。
- ・反応として見ると、問いと答えの関係を見る反応、似ているちがうなど比較する反応、情報に対して反応する「なるほど」「はじめて知った」「どうして」などの納得反応、疑問反応などをベースに進めていくことになる。
- ・その部分を活性化してくためには、最初の1時間目の動物であったり、赤ちゃんだったり、問いがあったり、題名読み、想像を膨らませる、問いの部分では、どんなだろうと思わせたり、といった最初の活動なしに読んでいくと、こう書いてありました、ということで終わってしまう。問いと答えということに関係なく、おもしろいところはどこですかというように読めば別だが、問いと答えを中心にしていけばいくほど、心の動きといったものを感じにくくなる。それであっても感じるためには、最初の予想があって、一緒だった、ちがったということがあると、書かれている情報に対する反応が活性化されていく。
- ・今日の冒頭で教材配列に触れたが、2つの問いがあるタイプは「じどう車くらべ」で経験済みなので、最初に「じどう車くらべ」を思い起こさせておいたらいい。2つの問いに対して、段落のまとまりに答えがあったね、既習学習からの予想ということも入れておけば、この学習が問いと答えを明確に認識していく、2つの問いとの対応関係を見ていくということで、1年生の最後の学習にふさわしいものができるのではないかとと思われる。
- ・ライオンの赤ちゃんのところで、「1年くらいたつと獲物の捕り方を覚えます」ということがあるが、1年くらいというのが、ライオンにとってどれくらいという認識がない。動物の2才というともう大人。3才では一線で戦えるところまで成長する。そこまでの認識がないまま読む。子どもは人間の赤ちゃんのイメージが強いので、そのまま読んでいくとそれはちがうということになる。